

青梅市文化財ニュース

第312号

平成25年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

お月見

お月見は年中行事の一つです。旧暦八月十五夜の満月は「中秋の名月」と呼ばれ、古来愛でられてきました。今年は9月19日が中秋の名月でした。一足早い14日に青梅市民会館主催で、小学生と保護者が市民会館の屋上で、自分たちで作った月見団子や月見にちなんだ料理をお供えして、お月見をしました。お月見にまつわる話を聞いた後、台風18号の影響で時々むらくも叢雲に隠れる月を、肉眼と天体望遠鏡で見る、現代ならではの月見を楽しみました。

さて、お月見はどのようにして現在まで続く年中行事となってきたのでしょうか。

明治の初め頃、暦が太陽暦になるまで、月の満ち欠けを中心とした、太陰太陽暦(旧暦)で暮らしていたので、月の満ち欠けは、農耕を主とした生活と密接に関わっていました。暗い夜には、満月とその前後の月明かりは特にありがたかったことでしょう。

毎月めぐってくる十五夜のうち、特別に旧暦八月十五夜の名月を鑑賞するお月見は、東アジアに広くみられる風習といわれ、日本へは中国の唐から伝わりました。平安時代の貴族は、宮中で詩歌を詠み管弦を楽しむ月見の宴を催して、中秋の月を鑑賞するようになりました。中秋とは、旧暦で秋は7・8・9月にあたり、8月はそのまんなかの秋であるため、十五夜の月は「中秋の名月」とも呼ばれました。ちょうどこの頃は、空気が澄んで月がくっきり美しく見え、夏の暑さも一段落し、月の出る夕方には涼しさが感じられ、くさむら草叢からは虫の音も響いてくる良い季節です。そろそろ秋の収穫物も実り始めます。もともと日本では秋の収穫祭が行われていて、伝来のお月見を受け入れ易い素地があったのでしょう。しかし、一般の人々にお月見の風習が定着するのは、伝来からずっと後の、平和な時代が続く江戸時代です。人々は、お団子や芋(里芋)やススキをお供えし、日ごろ生活を支えてくれる月に感謝し、イネの豊作を願いました。芋(里芋)は一株から子芋・孫芋とどんどん増えるので、子孫繁栄の縁起物とされお祝い事に用いられてきました。芋はこの頃収穫され始める時期で、月見のお供え物にされるが多かったため、「芋名月」とも呼ばれるようになりました。ちなみに中国では月餅がげっぺいお供えされたり、贈られたりするといえます。

もうひとつ、日本独自のお月見があります。九月の「十三夜」で、中秋の名月の一か月後、十五夜より2日早い十三夜の月を鑑賞します。八月十五夜の月に対して「のち後の月」、「なごり名残の月」といい、江戸時代には「芋名月」に対して「豆名月」、「栗名月」ともいうようになりました。今年は10月17日が「十三夜」です。十三夜の月は、もう少しで満月になる少し不完全な円形の月です。それを愛でるようになったのは何故でしょう。明快な理由は不明とされていますが、完全な形より不完全を喜ぶ日本人独特の感性からとも、また、以下のように、「後の月」を鑑賞するようになっ

た平安時代の天皇の風流からともいいます。

平安後期の公卿・中御門右大臣藤原宗忠の日記『中右記』に、「風流天子といわれた宇多天皇(887～897 在位)が九月十三夜に、今宵雲きよ浄く月明らかなり、明月無双と仰せられ、我朝九月十三夜を以て明月なの夜と為す。」と書かれています。また、江戸後期の曲亭馬琴の『俳諧歳時記しおりぐさ 萩草』に、「天曆7(953)年、村上天皇の時、八月十五夜が先帝・朱雀天皇の国忌に当たったため一か月延期すると同時に、命日を避けて2日早い十三夜に、観月をおこなった。」とあります。

そのうちに、「十五夜」と「十三夜」の両方とも月見をするものとされ、一方だけでは「片見月」といわれるようになりました。

青梅でのお月見については、40年前の調査記録があります。

十五夜には、あん入りの団子を作り、黄な粉を付けて食べたり、芋の葉にさつま・なす・きゅうりなど、その頃採れる物をお供えしました。子供は団子を盗みに来ても良いことになっていて、先のとがった木で突いて取っていきました。「盗まれると蚕があたる。」といい、取りに来ても知らん顔をして取らせていました。

今では道徳的にも考えられない事かもしれませんが、関東や関西の他地区でも子供には許されていたようで、広く行われていました。かつては子供の死亡率が高く、子供は神の領域に属するもの、神の使いとも考えられていましたし、お月見はハレの行事でもあって、子供がお団子を食べてくれるのはありがたい、縁起が良いと考えられたようで、どの家でも障子のかげから見守っていました。

十三夜は、十五夜と同じように行いましたが、供え物が、柿・梨・トウモロコシなどに変わりました。

今や人類は、昭和44(1969)年に月ロケット「アポロ11号」を打ち上げ、月面着陸し月面歩行をなしとげ、以降、月の科学的探査を続けています。市民会館の屋上でのお月見でも、天体望遠鏡で月のクレーターを観察しました。そして、肉眼で「月のうさぎ」も確認しました。日本だけでなく、世界中で月は見続けられ、餅つきをするうさぎ・不老不死の薬をつくるさぎ・ろば・わに・がまがえる・ひきがえる・女の人おばあさんの横顔・本を読むおばあさん・ハサミがひとつのかに・木をかつぐ人・ほえるライオン・泣き顔の男・水をかつぐ男女・月にすむ少女・バケツをはこぶ女など、国や民族により様々な見え方が、今に伝えられています。

参考文献

青梅市教育委員会(1972)『青梅市の民俗 第2分冊』.223

高橋睦郎(2010.10.16) 花をひろう「後の月」.朝日新聞記事

(文責 三好 ゆき江)